

S. Fitzgerald 短篇論, (その2)

“Ice Palace”と南北戦争後遺症

足立 富美

(1)

1972年カリフォルニア大ロスアンゼルス校の授業時間、詩文の時限であったけれど、若い講師は次の詩を朗読して、簡単に批評を加えた。

the Portent (1859)

Hanging from the beam,
Slowly swaying (such the law),
Gaunt the shadow on your green,
Shenandoah !
The cut is on the crown
(Lo, John Brown).
And the stabs shall heal no more.

Hidden in the cap
Is the anguish none can draw ;
So your future veils its face,
Shenandoah !
But the streaming beard is shown
(Weird John Brown),
The meteor of the War. (1866)

—by Herman Melville—

講師が上述の詩を口ずさみ終った途端に、学生達も口を揃えて、リサイトを始めた。実に瞑想的に重々しく、この詩を暗誦して教室中がしーんとなったのを思い出す。当時の私は John Brown が奴隷解放の熱狂的な主導者であり、Harpers Ferry (ヴァージニア州) に於て反乱を起し、黒人達の蜂起をうながしたけれど、遂に1859年 Shenandoah に於て捕えられ、絞首刑に処せられた John Brown (1800—1859) の生涯を知らなかった。

南北戦争の発端となった精神的もり上がりを、助長したものには多くの原因が考えられる。それらは実に複雑多岐にわたっていて、個々について解明する事は至難であると今日でも考えられている。当時、事件は続出して起り、その真相は今もって、解明出来ぬ状態である。亦それと共に、南

北戦争の後遺症は未だに深く、南部諸州人対北部人の気質の中に、根づよく残されて、そのわだかまりの相剋が消え失せる日は、いつのことかと懸念される程である。亦私達にも強く教えられた文学史上の原因となったものに、Harriet B. Stowe (1811—1896) 女史が、その小説“Uncle Tom’s Cabin” (1852) の中に、奴隷制の最悪の様相を取材して、その制度の不幸と残酷さとの描写によって、幾百万人の読者に強い驚きを与えた。メイソン、ディクソン線の南で行われている労働制度について殆んど知らされていない北部の多数の人々は奴隷制度が、いかに罪悪なものであるかを認識させられると同時に、嫌悪すべきものと次第に痛感するに至った。

文人達の間でもこの奴隷問題が痛切に感じられるようになると、哲人 Ralph W. Emerson (1808—1882) も、同志 Henry D. Thoreau (1812—1862) と共に起って、先の John Brown を支援した。この南北諸州の危機に当って、始めて両人はその思想を力強い行動に現して、Harpers Ferry の狂的英雄のために闘ったと言われている。裁判の後に、Brown が処刑されると Emerson は Thoreau と共に起って、彼のために弁護演説を実行したのである。この間にも南部は、黒人の反乱蜂起の恐怖にさらされた。Brown の「犠牲」は地方的感情を驚く程刺激した事になる。そして Brown は交戦中には、北軍の感動的な軍歌の主人公となる位であった。

John Brown’s body lies a—moldering in the grave.

His soul is merching on !

(ジョン、ブラウンの体は墓の中で腐りつつ横たわっている。が、彼の魂は進軍をし続けている。)

と、兵隊達から繰り返し歌われる程であったから、名をなす詩人、文人達が Brown を主題として作品を世に問うた事は首肯出来る当時の成行であった。Melville の短詩“The Portent” (1頁掲載) も明白に Brown を謳った詩人の瞬間の心象であっただろう。しかし、ここまで米国歴史をひもとくと、前述の教室風景が、現在も直、西部の大学で、目前に展開された事に、一入の感慨を覚え、南北戦争前後に関心がそそられて行くのであった。

(2)

丁度その頃、Abraham Lincoln (1809—1865) が共和党候補から大統領に選出されて、第16代大統領となった。合衆国から南部が分離する傾向を示し始めた頃であった。Lincoln は、“This Government cannot endure permanetly half slave and half free.”と宣言し、共和党は活発に奴隷制廃止か、南部諸州分離かの、いずれかを選択せねばならない破目に陥ち入った。1860年、South Carolina 州が、合衆国より分離した。つづく1861年、Virginia, Alabama Florida, Mississippi, Louisiana, Texas がこの例に倣って行った。この直後に Confederate State of America (アメリカ南部同盟) が組織されて、Jefferson Davis (1808—1889) が大統領に就任し、その首都をヴァージニア州のリッチモンドに置いたのである。私は Edgar A. Poe (1809—1849) がその青年時代を過ぎた土地としてのリッチモンドの方がなつかしくて、今夏 Williamsburg からの帰途、リッチモンドで車を下りて、史跡を訪ねて見た。芝生の原に眠る多数の墓石に、南北戦争の面影を偲んだけれど、陽光のうららかに輝く、このリッチモンドの街路に立っても、Poe の歌った、あの神秘的な詩情は一挙には湧いて来なかった。1861年南部同盟軍砲兵隊が、サムター要塞を砲撃した。いよいよ開戦の幕が切って落されると、直に Virginia, Arkansas, Tennessee, North Carolina 諸州が南部同盟に加入したのである。南北戦争の実戦状況を更に述べるのが、この小論の目的ではないので、省略

することにするが、遂に1863年優勢な北軍は、Gettisbury に於て、又同じく Vicksburg にて南軍を破り、南軍司令官 Robert Lee (1807—1890) 将軍は敗北を認めて、北軍に降伏をしたのである。それから5日後、あの誠意の人、Lincoln 大統領は南部人の手にかかり、暗殺されて終う惨事となった。

(3)

ここに取り上げる“Ice Palace”(1920)は、南北諸州の人々の気質の中に残る対立の心理を、つまり根本的な性格の相剋をテーマとした作者 Fitzgerald の得意とした短篇であり、即ち南部人と北部人の心理的反目を、或婚約事件にからませて描いたものである。1920年の出版であり、最初期の佳作の短篇集“Flappers and Philosophers”の中に組み込まれている。1920年といえば作者の生涯にも、忘れ得ぬ事件の集中して起った年である。まず、1918年にプリンストン大学の学窓を、Fitzgerald は途中で投げうって彼は兵役へ這入り、(何故なら1917年にアメリカが第一次世界大戦に参戦したので、多くの学徒達も学業をすてて出陣する事になった。)Kansas 州、Kentucky 州、Georgia 州のキャンプを転々と移動した後、6月、Alabama 州、Camp Sheridan に移駐し、その地にて、アラバマ州最高裁判所判事の末娘、Zelda Sayre に出会い、恋愛関係が生じたのである。

1919年、終戦となったから、New York へ出た、彼の処女作“*This Side of Paradise*”が Scribner 社より出版されて、画期的年を迎える事になった。続いて Zelda Sayre (1900—1948) と婚約する運びになった。その当時の作者の履歴が、背景として描かれている。

この作品に登場する南部娘、Sally Carrol は、ジョージア州生まれの乙女と設定されているが、彼女こそ婚約当時のアラバマ州生まれの Zelda その人である。北部の男性 Harry Bellamy はミネソタ州出身の Fitzgerald の若き日の分身と考えられる。

梗概を述べるなら、南部の夏のけだるい午後 Sally Carrol は二階の窓のしきいに頼杖をついて、向うの通りから、古い車を運転しながら、こちらへ近づいてくる友人、Clark の車が進行して来るのを眺めている。

彼は車から身をのり出して、二階の彼女へ呼びかける。「泳ぎに行かないか？」と誘う。彼女も何もする当がないので同意して、車に同乗する。

「君は北方人 (Yankee) と婚約したというじゃないか、本当かい？」

と Sally Carrol は詰問された。

「兎も角、北方人とは根本的に南部の我々は違うのだから、行って欲しくない、この町にいつまでもいてほしい。」

Sally Carrol はそれに答えている。

「貴君達みんな好きよ、だけど何か悲しい無気力で落伍者の様な南部の男には惹かれない。」

第2章に於て、北部人 Harry Bellamy が婚約決定と挙式の日取り決めのため、タールトンを訪問して来る。用件は直ちに決定され、その4日目の滞在中、両人はタールトン市民や南北戦争戦没者の墓地を散歩する。南部の女性代表、Margery Lee の墓前に立つ、29歳の没と墓碑に印されている、彼女は南部女性の守護神と象徴される。南軍の司令官 Robert Lee の名門の名を取り、Lee 家の栄光につながる貴族的な女性として描かれている。

それより谷を下って、最後に無名戦死者達の墓前に立って、Sally Carrol は、自分の南部女性としての生い立ちの昔を語り、“*Dead South*”のために、その命を賭した兵士達の美しい精神を、涙ながらに Harry に語る。

日本でも同じような風習があるが、女性の方が婚約者の実家を訪れて行く時のあの新鮮な興味や、不安のときめきやらが第三章に描かれて、南国娘が始めて遠い北部の町へ訪ねて行くと、そこで直面した北部の家庭生活、両親の様子、義兄、義姉の容姿等も描かれて、1月半ばの北部 Bellamy 家

訪問は丁度冬のカーニバルの最中であつた。到着の夜はダンス、パーティー、多くの美男、成功者に紹介される。その群の中から Patton 教授が話しかけて来て、北方人の特徴を、イブセンの作品から登場人物を引用しながら、精神的にも、環境に支配されたとして、北方人の人物像を語ってくれる。そして Bellamy 家の家族の個人々々についても著しい人となり語られる。Sally Carrol も又彼女で、話しに和して、新しい人達に会うと、その人達を「犬族」か「猫族」に、心理的に区別して考えるくせを持っていると、教授に告げる。

滞在 2 週間目に路上で、変な服装の汚い人物を眺めた時、「彼は南部人に違いない！」と Harry が罵声を発したことから、2 人は喧嘩までする。何をみても、——誰に会っても、——故郷の南部を思って、Sally Carrol は比較をしては、望郷心がつのるばかり。

いよいよカーニバルの夜、松明行列を見物した後に、北部人の自慢する“Ice Palace”に這入って行き、その異様さに驚いていると、今度は地下の迷路へ Harry が案内する。迷路の中で彼女は Harry を見失ってしまい、彼女は 1 人取り残されて、呼べど、歩けど、誰もいない、出口もない、途方に暮れて、氷の道にうずくまり、無意識状態におち入ろうとする時、幻の如く、彼女の前に現われたのが、あの Majery Lee の幻影であつた。

(4)

作者は南部青年 Clark の性格と生活態度を次の様に描いて、南部人の特徴を露骨に印象づける。

Clark had “a income”—just enough to keep himself in ease and his car in gasoline—and he had spent the two years since he graduated from Georgia Teck in dozing round the lazy streets of his home town, discussing how he could best invest his capital for an immediate fortune. Hanging round he found not at all difficult; a crowd of little girls had grown up beautifully, the amazing Sally Carrol foremost among them; and they enjoyed being swum with and danced with and made love to in the flower—filled summery evenings ……mostly they just stayed round, in this languid paradise of dreaming skies and firefly evening and noisy niggery street fairs.

(クラークには、いわゆる不労所得があつた。気持よく暮せて、車のガソリンを切らせない程度のものであつたが、そんなわけで、ジョージア工科大学を卒業した後、彼は故郷の町に戻り、のんびりした通りのあちこちで何をすることもなく暇をつぶし、どうすればもっと早く財産を増やせるかなどと議論しながら 2 年間を送って来たのだ。

ぶらぶら時を過すことには何の苦しみもなかつた。幼なじみの女の子達はみな綺麗な娘に成長していたし、(中でもサリー・キャロルがいちばんだ) 彼女達と泳いだり、ダンスをしたり、夏の夜には花の咲き乱れた野原で抱き合ったりするうちに、時は流れて行つた。おおかたは美しい空や螢のとび交う空や、にぎやかな黒人街のバザー等に取りかこまれて、この物憂げなパラダイスの中で生き続けるのであつた。)

と述べているのに附言するかの様に、Sally Carrol も南部の青年の性向を認めながらも次の言葉で反駁をしている。

“Then why you getting engagel to a Yankee ?”

“Clark, I don't know, I'm sure what I'll do, but well, I want to go places and see people, I want my mind grow. I want to live where things happen on a big scale.”

“What you mean ?”

“Oh, Clark, I love you, and I love Joe here, and you all, but you'll,—you'll…”

“We all be failure ?”

“Yes, I don't mean only money failures, but just sort of—of ineffectual and sad and and—oh, how can I tell you ?”

「じゃなぜ北部者となんで婚約するんだ？」

「それはわからないのよ、クラーク、この先どうなるか私にもわからない。でもね、私はいろんな土地へ行きたいし、いろんな人にも会い度いの、精神的成長だっしてたい。物事が大きく移り変って行く場所に住んでみたいの。」

「もう少し具体的に言ってもらえないかなあ。」

「クラーク、貴君のこと好きよ、ジョーも好きよ、でもね、貴君達はみんなつまり…」

「いきつく先はみんな落伍者っていうわけかい？」

「そう、だけど私はお金の上の落伍者を言ってるのではないのよ、私が嫌なのは…何というか、無力感。それに物悲しさ。どう言えばわかってもらえるかしら。」

それから、これらの会話の最後の部分に、Zelda の人柄を思わせる性格に言及している、つまり Sally Carrol は自分の性向には、二重性格が存在すると、ほのめかしている。彼女のモデルは若き日の Zelda である事には間違いない、けれど、この作品の出版が1920年であり、作者 Fitzgerald にとっては若冠23歳であった事を考えると、この若さで彼は Zelda の性向を把握していた事に、一応は驚くけれど、実際にはこの発言は Zelda 自身の告白に依るものであろうか？と、いぶかる次第である。

Sally Carrol は次のような言葉で、彼女の性格づけをやってみる。——

“I'd feel I was—wastin' myself. There's two sides to me, you see, There's the sleepy old side you love ; and there's a sort of energy—the feeling that makes me do wild things. Thats the part of me that may be useful somewhere, that'll last when I am not beautiful any more.”

「私はきっと自分が無駄にすりへっていくような気がするの、私の中には2人の私が棲んでいる、一人は貴君の好きな、ものぐさで、けだるい私、だけど、それとは別に、私の中には一種のエネルギーのようなものがあって、それが私を冒険へと駆りたてる。そちらの方の私が役に立つ場所がどこかにあるかも知れない。もし私が年をとって、綺麗じゃなくなっても、その方の私は、ずっとそのままではないだろうかってね。」

上述の3ヶ所の引用文から、作者は Sally Carrol に乙女らしく、この世に対する希望や彼女自身の性格を語らせながら、南部人、特に南部青年達の生活態度、特徴をクラークに焦点をあてながら、いともてきぱきと描写している、それは露骨であるかも知れない。しかし、真実に近い言明である、私は考えるのである。何故なら今度の東部旅行中、ワシントンからニューヨーク迄珍しく汽車

旅をした。あのニュージャージーのトンネルを抜けて、摩天楼の都に到着したが、(作者 Fitzgerald もしばしば通ったコースである。)たまたま隣の席にジョージア州メーコン市の生まれという青年が乗って来て腰を下した。

道中ずーっと彼と雑談をしながらニューヨーク迄這入って行ったが、私はその時、彼の口からジョージア気質を引き出し度くて、南部人を特徴づける、“lazy”とか“languish”を度々用いて、一南部人“かたぎ”を訊ねて見た。すると両方の傾向を彼はすなおに即座に肯定したのである。しかし、「北部人は？」とこちらが質問すると、彼は顔をしかめて「Damn!」と一言口走ったのである。

(5)

両人はタールトン訪問の最後の日になって、肩を並べて、南北戦争戦没者達や無名戦士の霊が眠る墓地を散策した。その墓地には1850年来の死者から埋葬されていて、70年代のもの、90年代の墓石も並んでいる。その中に碑の丈が高く、頂上が丸く彫られた墓石が一基ある。碑文には「Majery Lee 1844—1873」とだけ刻まれている、碑の前に立った。この埋葬者は明かに女人である。29歳の若さで死去したことが記録されている、唯それだけである。結婚の記録はない。Sally Carrol は声高に墓碑銘を読みあげ、「Wasn't she nice? She died when she was twenty-nine, Dear Majery Lee!」と、そーっと付け加えて、感慨にふける。それは南部の名門 Lee 家の栄光につながる、Majery の面影を、彼女はロマンチックに描いて、想像している様である。

それから *Gone with the Wind* のヒロイン—Scarlet Ohara の華麗な面影を髣髴とさせるような“せりふ”をもって彼女は呟く：——

“She was dark I think : and she always wore her hair with a ribbon in it, and gorgeous hoopz-skirt of alice blue and old rose.”

“Oh, she was sweet, Harry ! And she was the sort of girl born to stand on a wide pillared Porch and welcome folks in, I think Perhaps a lot of men went away to war, meaning to come back to her, but maybe none of them ever did.”

「彼女はきつと黒髪だったわね。その髪はいつも、リボンをつけて、淡い青と灰薔薇色のきらびやかなフープ・スカートをはいていたのよ。」

「本当に素敵の人だったのよ。ハリー！太い柱のあるポーチに立って、お客様を暖く迎えるような人、沢山の男達が出征する時にも、彼女のもとへ帰ることのみ考えて出征して行ったんじゃないかしら、でも恐らく誰一人として還っては来なかった。」

1860年から1865年の間に青春時代を持った男達は出征して、誰一人として還らなかった。南部の騎士道精神に殉じて散華していった勇士達を偲ぶと、その内の一人(多分マジョレーの婚約者)も遂に彼女のもとへ、生還しなかった事まで、Sally Carrol は多感な感受性で、推量しているのである。

南部一ばんの名門の出、名将 Robert Lee (1807—1870) の故郷はヴァージニア州である。その郷土軍ヴァージニア軍団を卒いて、彼は幾多の会戦に出撃して征った。ヴァージニア州出身の傑物達に惹かれていたので、今回の旅行中も、北から南の端まで飛んだり、車を馳せたりして見学を楽しんだけど、南北戦争に焦点を合せて来たため、知らず知らずのうちに Lee 将軍の事跡に踏み込まざるを得ない結果になった。Lee 家直系の令嬢が、ジョージア州タールトンと設定される場所に眠るとは？

Lee 家の直系家系図を調べても、該当者は発見出来ないのである。それで彼女もあくまで、Fitzgerald のフィクションだと考えるのである。Lee 将軍を連想させる緒としての…。

Lee 家は南北戦争以前から、将軍の生涯中、名声高く、北部人(特にリンカーン)からも、囑望されて度々北軍司令官の地位に懇望された人物である。南部に於て、その名声、人望の高く、厚かった事は言うまでもない。何故かと言えば、Lee 夫人 Mary Ann Custis の父親は George Washinton Park Custis と名乗り、実に第 1 代大統領 George Washinton の養子であった人物である。東部旅行中考えたことは、アメリカで最も人望のある国民的崇拜者と敬される人は、George Washinton と Abraham Lincoln であると思えてきたのである。どの都へ行っても、両人の銅像か記念館を眺めたためであろう。

さて、南北戦争時代の南部の英雄、Lee 将軍の生涯をいかんまで述べねばならないが、Lee は 1829 年 West Point の士官学校を卒業している。1852 年には士官学校長に就任して、業績を多く残し、欧州の士官学校に比肩出来るものとした。1855 年テキサス州騎兵連隊附中佐の折に、1 頁に掲げた John Brown の反乱が起り、故郷ヴァージニアへ急拠帰り、彼が郷土軍を率いて、John Brown を Herpers Ferry にて捕虜となし、蜂起反乱を制したのである。こう言えば、Lee は奴隷制州の味方なのか？と、誤解されるかも知れぬ、いや決して彼はそうではなかったのである。“I am not pleased with the course of the “Cotton States,” as they term themselves……One of their plans seem to be the renewal of the slave trade. That I am opposed to on every ground.”

「自分はあの綿花栽培州の方針をよるこんでいる者ではない。彼等自身が称している通り、…彼等の計画の 1 つは奴隷売買の更新にあるように思われる。この件はあらゆる理由に於て自分は反対するものである。」と所信を表明している。

サムター要塞が砲撃された時も、ヴァージニアは未だ合衆国より分離していなかった。Lee はワシントンへ呼ばれて、北軍の司令官にと乞われた。彼は息子に書いたことがあった。“I wish no other flag than the Star sprangled banner’ and no other air than“ Hail Columbia.”「私は星條旗以外のどんな他の国旗も望まないし、“米国愛国歌”以外のどんな曲も望まない。」と、1861 年にヴァージニアが合衆国から分離するにおいて、Lee は北部の軍籍を辞して、故郷ヴァージニアに帰り、首都リッチモンドへ行った。翌日直ちにヴァージニア軍の司令官に就任した。彼は「郷土を守るために」と起ったけれど、続いて海軍基地 Norfolk と工廠のある Harpers Ferry が北軍に占領されたのである。いづれもヴァージニア州にある軍部の要地である。

それより、北軍と南軍の激戦がテネシー州、ミシシッピ州で戦われ、Lee は南部軍を率いて戦陣を進めて征ったが、それらの会戦を述べるのはこの小論の目的ではない故に省略する。遂に Gettisburg と Vichsburg に於て、北軍に敗れて、1865 年 4 月、南軍司令官 Lee は、Appomattox にて敗北を認めた後に、北軍に降伏した。

Lee 将軍こそは、南部人の心中では、戦場の天晴れ闘士と謳われ、北部人からも平和を守る志士と敬された。全く高潔な将軍であったことが文献の中にも多く記録されている。晩年はワシントンへ行き、大学の創立を助けて努力した。その大学が現在の Washinton and Lee University である。アーリントン墓地の丘に連なる高台の 1 角に Lee Memorial Hall が、今も直、美観を呈して建っているのは、不思議ではないのである。

さて、それより両人は丘を下って、無数の墓石の並ぶ場所へ来た。

“The last row is the saddest-one, way over there. Every cross has just a date on it and the word ‘Unknown.’”

She looked at him and her eyes brimmed with tears.

“I can't tell you how real it is to me, darling.”

“How you feel about it is beautiful to me.”

“No, no, it's them,—that old time that I've tried to have live in me These were just men unimportant evidently or they wouldn't have been 'unknown,' : but they died for the most beautiful thing in the world—the dead South, You see.”

「いちばん悲しいのは最後の列よ、一ほら、あそこ、どの十字架に刻まれているのも、没年と「無名戦士」ということばだけ」

ハリーを見る彼女の目には涙が滲んでいた。

「私には何もかもひしひしと感じられる。——ね、あなた。」

「君は美しい心を持った人だ。」

「そうじゃない、私ではないのよ、美しいのは彼らの方よ、私が自分の中に息づかせようとしているあの古い時代の方よ。あそこに眠っているのは「無名戦士」という名のもとに葬られた取るに足りない人々でもあるけれど、彼らはこの世で最も美しいもののために……“死せる南部”のために死んで行ったの。」

未だに南北戦争戦没者のために涙を流すことのある、多感な南国の乙女である。又真情を洞察出来る乙女として描かれている。が、しかし、歴史の事実を知らぬ、単に主観的な、瞬間的な感情移入の涙であるのだ、が、因に、北軍の動員した兵力は2,898,304人であった。その内の戦死者は359,528人と推定された。他方南軍の徴集兵力は1,300,000人と言われ、戦死者は258,000人であったと算定されている。

戦死者の膨大な数、その損害の莫大なこともさることながら、両側の人心に与えた、心の古傷は今もって、120年をけみする現在に於てすら、特に南部諸州の人々の中に残された精神的しこりには、未だに癒されぬものが多々ある。直且つその上に5日後のリンカーンの南部人による暗殺は国民両側を混乱の過中にまき込む事になった。—南部はリンカーンの死によって、戦時中よりもはるかに、戦後に大きな危機にさらされる事になったのである。

正しい論議、奴隷廃止にその端を発した事件が、国家的大戦争となり、大殺戮がアメリカ国内に於て、5年間にわたって繰り返され、遂に終局は来たけれど、この大規模の時代の怒濤が衆国全土の人心に影響を与えぬ筈はなく、又戦場と化した南部諸州の州民及びその子孫に何らかの不幸を与えずには置かなかつたという事は、第2次世界大戦を身を以て経験ずみの私には了解出来る、拭い去ることの出来ぬ事実である。

しかし、奴隷解放→南北戦争→黒人台頭→人種差別問題。

と上の図式の成行をなす、所謂1つの内政問題のひずみを示す人種差別問題を考えてみても、原因となる黒人を導入した人々は誰であったのか？ここで歴史を精読して、真実を正視しなければならぬと考えるのである。

ヴァージニア州 Jamestown の最初の植民達の上陸した松林の海岸に近く、一個の大きな石碑が現在建っている。その表面にこの地に最初に入植した團員達の氏名と職業が刻明に彫刻されて記録されている。その中に既に3人の奴隷達が彼等に同行して、上陸したことを伝えている、これを私は読んだ時には一瞬驚いて、一体これは、何を物語るものであるかを、心に深く問い直して考えたのである。それは1607年の植民地創設の時であった。新大陸への最初の植民である。

「17世紀の初めに、英国商業資本家は、植民事業の広い遠大な意味を十分認識せずに、唯アメリカの土地を利潤のためにのみ開発しようと夢中になっていた。そこで彼等は国王から土地開発の特

権を得ようと懸命であった。」(C. ヒアード著アメリカ合衆国史)と、以上の証言はすべてを語って余りあると思うのである。

(6)

1月の中旬 Sally Carrol は婚約者の実家、北国のミネソタ州の或る都市を訪問する。車窓に写る雪景色を眺めては、彼女は驚きで一杯である。寒さのために、眠れぬ一夜を過して、列車は目的地へつく、駅に出迎えたのは婚約者の兄と義姉、早速彼女は、義姉の容姿や言動に幻滅を感じ始めた。

Harry は先ず、彼女の初印象を傷つけまいと、北部都市の特徴を詳しく要約して、彼女に了解を求めようとする。――

“One thing I want to ask you,” he began rather apologetically, “You Southerners put quite an emphasis on family and all that—not that it isn’t quite all right but you’ll find it a little different here, I mean—you’ll notice a lot of things that’ll seem to you sort of Vulgar display at first, Sally Carrol ; but this just remember that this is a three-generation town. Everybody has a father and about half of us have grand fathers, Back of that we don’t go.”

「ひとつだけ君にお願いがあるんだ」と彼は幾分遠慮がちに切り出した。「つまり、君たち南部人は家柄とかそういったものを、とても重視する。……勿論それがいけないってわけじゃない。ただここでは少し事情が違うんだ。だからね、サリー・キャロル、君の目には下品だと見えるものが多々ある、と思う。しかし、覚えていてほしいのは、この街はまだ創設以来3代しかたっていないという事実なんだ。ここの住民は父親の代から住んでいるけれど、祖父の代からと言うのは半分ばかりさ。それより昔にさか上ることは出来ない。」

例えば、家柄を重んずる、南部人の感情と、北部人の家系に対する感想を要約して、巧に表現している。

その夜のダンス・パーティの会場で、ハリーの友人やこの土地の成功者に紹介されたが、その中にハリーの大学の教授というパットン氏が傍に来て、北部のこの都市の特徴を、スエーデン人の移民で創設された町であるために、イブセンの作品から、その登場人物達を引用しながら、陰気でいて狭量な心の持ち主が多いが、正義感には非常に富んでいる等と話題を提与する。

“I think they’re growing like Swedes—Ibsencsque you know, Very gradually getting gloomy and meloncholy, It’s these long winters Well, you find in his characters a certain brooding rigidity, ’They are righteous, narrow and cheerless without infinite possibilities for great sorrow or joy.”

「連中はまるでスエーデン人の様な育ち方をしている。イブセン風とでもいうかなあ。知らず、しらずのうちに心が暗くなり、メランコリになってゆく。長い冬のせいだ。読めばわかるが、彼の登場人物には陰鬱な厳格さがある。彼等は実直で、狭量で快活さに欠ける。そして深い悲しみや、大きな喜び等彼等には縁がないのだ。」

奇智に富む彼女は北部人の特質と南部人の性格を「犬科」と「猫科」に区別して、動物学的にユーモラスな見解を述べて、教授とは痛快な話題に花が咲くが、例によって、いつものことながら、

…会話の傑作が二人の間にやり取りされるのは、Fitzgerald 文学の粹といえる個所である。

滞在中の或日、路上でだぶだぶのズボンをはき、汚い服装の男を見た事で、Harry が大声で“*He must be a Southerner, judging by those trousers, Those damn Southerners!*”と罵ったことから大喧嘩をする。Sally Carrol は怒りに声をふるわせて、「止して下さい。」と叫ぶけれど、Harry の方は胸中にわだかまる南部人への憎悪を、吐き出さずにはおられるものかとばかりに、南部人の欠点を攻撃しつづける。そして Bellamy 家の玄関に近づいた時に、「どうも言いすぎちまったようだ、悪かった、サリー・キャロル」と詫びてはいるが、1日中口もきかずに過した。

その夜ヴォード・ヴィル劇場が幕を閉じた時、オーケストラが“Dixie”を演奏し始めた。

遙かなり 遙かなり
南の国、テキシー、

すると彼女は、昼間味わった涙より強く、何かが全身に湧き上って来た。オーケストラの拍子に合わせて、彼女の中のいにしへの亡霊達が行進して来るのが見えて、Sally Carrol は無意識にも、彼等に向って手を振り度い衝動さえ感じた。何をみても、何を聞かされても、彼女の中に湧き上るものは「南の国への恋しさ」南への郷愁である。けれど、「私は所詮夏の国の女^{ソレイユ}！、到底この北国にはなじむことは出来ない。」と Sally Carrol は呟く、それは Zelda の心中からの呟きでもあったし、又 Zelda は遂に Fitzgerald の故郷、St. Paul になじむことの出来なかった妻であった。

カーニバルの宵に、美しく完成した“Ice Palace”の見物に行く、松明行列が炎の列をなして、過ぎてゆくのを見送った後に、宮殿の中へは入って、奇異な雰囲気被打れていると、次は地下の迷路へと行き Harry を見失ってしまう、呼べど、歩けど、応える声もなく、又出口を発見する事が出来ない。途方にくれて、呆然自失、氷の路上にうずくまっていると、身も心も冷え切って、意識も朦朧となっていく、——

1920年出版のこの短篇に Fitzgerald は後の Zelda の人生航路を象徴して描いたのであろうか？、その予感が当時あったのであろうか？何故なら、恰も Zelda の将来を暗示したかのような、不幸なおのきさえ、しのばせている。1930年、結婚後10年、Zelda は遂に精神に異常を来たした。スイスにて、精神科医權威の門を叩いた。「精神分裂症」と診断を下され、「回復は難しいであろう」という、所見が述べられたのである。永遠の迷路の中をさ迷い歩く Sally Carrol は、後年の Zelda の狂いの姿を暗示して哀れである。

参考文献

- 1) Malcolm Cowley ed, with Introduction, *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, Charles Scribner's Sons, N.Y.
- 2) *Encyclopedia Americana*, Volume 6. and Volume 17, American Corporation, N.Y.
- 3) C. ビアード著、「アメリカ合衆国史」 岩波書店
- 4) R. C. スピラー著「アメリカ文学の展開」 吉武 好孝及び待島又喜共訳。
- 5) 「文芸雑談」12月号1980年、中央公論社
- 6) 細入藤太郎著「アメリカ文学史」培風館、東京、1971。
- 7) 足立富美著「S. フィッツジェラルド研究」北星堂、東京、1970年・1973年。
- 8) Robert P. Warren, *Understanding Poetry*, Holt Rinehart & Winston, N.Y.